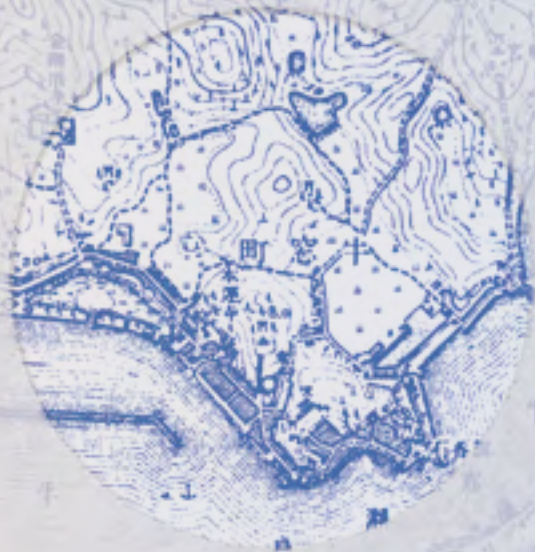


# 牛窓再読

## Revisiting Ushimado

- 01 ushimado:labo (牛窓ラボ)のこと・調査概要
- 03 しおまち唐琴通りと調査対象の分布
- 05 住み継ぎの要因と課題・インタビュー調査
- 07 「牛窓の街並みを「再読」する」・トークイベント開催報告
- 11 街並みへの関心・トークイベント来場者の声
- 13 建物の実測調査・住み継ぎにむけたケーススタディ
- 17 Column: 街並みの魅力に迫る街路散策実験
- 19 調査の成果と今後の課題
- 21 あとがき



私たちが牛窓のまちに魅力を感じ、牛窓を訪れることになったのは2021年頃だった。何がそうさせるのかわからないけれど、今起きている現象のことを解明してみたいと思っただし、このまちの奥深さをもっと知りたかったのである。住まいやまちづくりに関わっている我々の間では、牛窓で起こっている住環境の現象を「住み継ぎ」と表現している。「住み継ぎ」とは従来は血縁・地縁といった間柄で相続・取引されていた住宅ストックが、それ以外の間柄にある者との間でも取引されることであり、移住希望者が空き家を探索し、空き家の所有者や地域住民と交渉し、移住してから地域の暮らしに馴染んでいく一連のプロセスとして捉えている。交通の便も良いとは言えず、不動産流通を促す仕組みが整っている訳でもない牛窓に、人は何故引き寄せられるのか。その理由となっている様々な側面を知ること、このまちに感じる奥深さの一部が現れ

てくるのではないかと想像した。私たちがこの調査で行おうとしているのは、それらを解明して分かりやすい言葉にまとめることではない。長い時間軸のなかで、人の営みや暮らしがまちを創り、コミュニティを形成し、景色を残し、未だ多様な経歴を持つ人々を寄せ付け、受け入れるまち牛窓を「再読(revisiting)」することで、我々がこれから生きていく世界の「灯」を見つけたい。

Ushimado.laboは住まい・まちづくりの研究や実践をしてきた、京都大学人間・環境学研究所の前田昌弘准教授と株式会社コロエ一級建築士事務所の片岡八重子が立ち上げ、2021年から牛窓テレモークの1室をラボとして借りている。関町に住む、岡國太郎さんや瀬戸内市企画振興課の松井隆明さんと課題を共有しながら、学生や設計事務所のスタッフと牛窓地域の調査・研究を行っている。

## 牛窓ラボ主な活動

2021年7月	キックオフ合宿 (2泊3日 参加者12名)	まち歩き、レクチャー、ラボの家具づくりワークショップ
2021年8月	調査スタート	インタビュー、空き家の実測調査
2022年3月	瀬戸内市協働提案事業採択	事業名: しおまち唐琴通りの歴史的建造物の住み継ぎケーススタディ
2022年5月	合同ゼミ	空き家の状況下見、調査報告、課題を共有
2022年5月	住総研22年度研究・実践助成採択	事業名: 歴史的街並みが残る過疎地域の「住み継ぎ」に向けた環境像の共有
2022年9月	イベント開催	トークイベント「牛窓の街並みを再読する」
	合同合宿 (2泊3日 参加者21名)	まち歩き、レクチャー、空き家の実測調査、片付け
2022年10月	冊子の発行	インタビューの記録をまとめた『牛窓がたり』第1号発行
2023年2月	イベント企画・協力	まちなか再生事業(瀬戸内市主催)「牛窓読書会」の協力



空き家の実測調査



唐琴通りまち歩き



レクチャー



唐琴通りの邸宅の見学



空き家の片付け



合同合宿 (岡山県立大学穂菫耕介研究室、佐賀大学宮原真美子研究室と)

## 住み継ぎインタビュー対象者の活動拠点

- ① ushimado TEPEMOK
- ② 備前日生信用金庫 牛窓支店
- ③ てれやカフェ
- ④ 牛窓カフェ
- ⑤ 風待ち亭
- ⑥ sajiya studio
- ⑦ ウシマドゲストハウス ねんどころ
- ⑧ 御茶屋跡
- ⑨ 太極拳 樂心舎

ほか、ペンションくろしお丸、山の上のロースタリ(地図範囲外)



— しおまち唐琴通り



## 実測調査を行った建物

- A 丘の上の二軒長屋
- B 唐琴通りの元米屋
- C 洋風の写真館
- D 路地裏の古民家
- E バス停前の元食堂

しおまち唐琴通りと調査対象の分布

# 住み継ぎの要因と課題…インタビュー調査

牛窓で活動する人びとは牛窓の街のどこに惹かれているのか。また、活動を通じて牛窓の街にどのような可能性や課題を感じているのか。住み継ぎにむけて、その背後にある、人びとが牛窓に感じている価値や具体的な方法・課題を探るべく、計12組を対象としてインタビュー調査を行った。いずれも牛窓に住居や職場があり、地域と関わりながら独自の活動を行っている人たちである(表1)。

毎回、インタビュー(語り手)の活動拠点を訪れ、1時間半〜2時間程度かけてその人の活動の内容に加え、活動に至るまでの経緯や活動で特に大切にしていることについて掘り下げてお話を伺った(写真1)。インタビューでは、インタビューが最低限の質問事項は用意するものの、基本的には語り手に自由に語ってもらうという「半構造化形式」を採用した。そのため、語り

の内容は多岐にわたったが、牛窓の街や住み継ぎに関連して共通するトピックとしては大きく、牛窓の特徴・魅力、移住や建物改修の経緯、地域の課題があった(表2)。

インタビューの成果については、ひとまず4名の語りを記事にまとめ、インタビュー集『牛窓がたり』第1号(写真2)として発行した(第2号、第3号も近日発行予定)。キャッチフレーズは「牛窓の語りを重ね、考える」である。語りを記録として残すことに加え、街の将来や住み継ぎについて関係者が対話するうえで媒体となることを期待した。なお、岡山県立邑久高校の協力のもと、邑久高校生3名が計2組のインタビューに同行した。

さらに、瀬戸内市企画振興課が進めるまちなか再生推進事業の一貫として開催した「牛窓読書会」では、ushinada.comが企画・進行に関わり、『牛窓が

たり』(第1号)を使った対話型ワークショップを行った(写真3)。読書会には4名の「語り手」に加え、牛窓の街で活動する事業者・経営者・住民が「読み手」として参加した。計約20名が「語り」についての語り」という、リフレクティング・プロセスの手法を用いた対話によって交流した。参加者からは、近くで活動しているのに意外と交流がなかった人と知り合えた「その人の知らなかった一面から牛窓の街についてより深く知ることができた」といったポジティブな感想が得られた。



写真3 「牛窓読書会」の様子

1	岡 國太郎 さん	牛窓しおまち唐琴通り保存と活性化プロジェクト
2	小林 宏志 さん	ミュージシャン・てれやカフェ・株式会社牛窓テレモーク
3	末藤 功太郎 さん	御茶屋跡
4	小田 聖子 さん	アートデザイナー・株式会社牛窓テレモーク
5	想田 和弘 さん	映画作家
6	谷 美香 さん	ウシマドゲストハウス ねんどころ
7	木下 尚之 さん	焙煎家・キノシタショウテン
8	さかい あつし さん・かよ さん	匙屋+sajiya stujio
9	永田 昭二 さん	ペンションくろしお丸・瀬戸内市観光協会
10	大饗 信彦 さん・橋本 典子 さん 常見 和広 さん	備前日生信用金庫牛窓支店
11	相澤 心也 さん	写真家・株式会社牛窓テレモーク
12	小原 悠雲 さん	牛窓カフェ

表1 インタビュイー(語り手)一覧



写真1 インタビューの様子：風まち亭



写真2 「牛窓がたり」第1号 書影

牛窓の特徴・魅力	移住や建物改修の経緯	地域の課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>●気候風土：海と山が近く自然に恵まれ、食材も豊富。気候が穏やかで、雨が少なく、冬でも暖かい。</li> <li>●景観・街並み：瀬戸内海の景観や唐琴通りの街並みが観光地化・消費されておらず、歴史や風土を身近に感じることができる。</li> <li>●コミュニティ：住民が一定の距離感を保ちつつもフランクに接してくれるので移住者でも地域に溶け込みやすい。</li> <li>●時間の流れ：都会とは異なり、人の暮らしに沿ったゆったりとした時間が流れている。</li> <li>●文化・風習：しこまや八朔ひな飾り、じゃぶじゃぶなど、地域や家ごとに口伝で継承されている風習・文化がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●移住のきっかけは、震災やコロナ禍、Uターン、親の介護など様々。牛窓を選んだ理由も、自身や親族の縁、景観やコミュニティに惹かれた、良い物件に偶然出会った等、人それぞれ。</li> <li>●空き家は多いが、すぐに借りられる物件は少なく、不動産屋にも情報が少ない。物件の探し方は親族・知人や地元住民のついでで紹介してもらうことが多い。</li> <li>●建物の持ち主と相談した上で空き家の改修工事を自ら行ったり、DIYワークショップを行うことで費用を抑えて自分好みにリノベーションしている。</li> <li>●都会に比べて賃料が安くスペースにもゆとりがあるので製作に打ち込みやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●雇用機会(企業・工場等)や教育機関(高校)が少なく、今後も人口流出傾向が続くことが懸念される。</li> <li>●全国的にみて目立つ産業・産品がないため地域を対外的にアピールするのに工夫が必要。</li> <li>●地元住民と移住者など、異なるコミュニティ間の交流が少なく、互いの価値観に触れる機会も限られている。</li> <li>●住民が暮らし続け、新たな住民を呼び込むうえでも、最低限のインフラ整備(下水等)は必要。</li> <li>●しおまち唐琴通りはヒューマンスケールな街路空間であり、そこに小規模な事業者が集積することで賑わいを生む可能性がある。</li> </ul>

表2 インタビュー結果要約(一部)

# 「牛窓の街並みを「再読」する」トークイベント開催報告



牛窓では近年、風光明媚な景色や歴史的な街並みが移住者や観光客を惹きつけているが、住民の高齢化、人口の過疎化といった変化のなかで空家・空き地もさらに増えている。このような牛窓の現状をみつめ街並み保全、住み継ぎといった視点から街の将来について考える一つのきっかけとするべく、牛窓の街並みをその歴史や変遷を踏まえて捉え直す（＝「再読」する）ためのトークイベント「牛窓の街並みを『再読』する」を企画した。建築・都市の歴史を専門とする三宅理一氏（元・芝浦工業大学教授、現・東京理科大学客員教授）を招き、三宅氏が1980年代に牛窓で行った街並み調査について紹介いただくとともに、港町・牛窓の特質について、瀬戸内海、そして東アジアという広い視野からのお話をいただいた。三宅氏の牛窓での調査の成果は、『牛窓町史』や『江戸の



外交都市・朝鮮通信使と町づくり」といった著書に詳しくまとめられている。トークイベントは牛窓テレモーク2階を会場とし、2022年9月3日（土）18時より開催した。当初の定員30名を上回る参加申し込みがあり、結果的に計48名の参加者が瀬戸内海に沈む夕日を背に三宅氏の話に耳を傾けた（参加者の内訳や感想などはp.11を参照）。「朝鮮通信使とその遺産」と題した三宅氏の講演の前半は、上述の著書にもまとめられている、江戸時代の一大外交イベントである朝鮮通信使が牛窓を含む瀬戸内海の寄港地の町

づくりに与えた影響についてであった。朝鮮通信使の目的（徳川政権による朝鮮との復交、その後、將軍の交代にもなう慶賀）と1607年にはじまり1811年まで計12回にわたって行われた派遣の仕組み、通信使と地元の人びとの様子が当時の絵図や渡航ルートなどを交えて解説された。鎖国体制中の当時の日本において、朝鮮通信使は異国の文化に人びとが直接触れられるほぼ唯一の機会であった。しかも居留地（長崎・出島）のような閉鎖的空間とは異なり、一時的とはいえ町全体を開放して異国の人びとを生活空間においてもてなすことから、人びとの生活・文化への影響は大きなものであった。牛窓は、老岐・相ノ島・赤間関・上関・蒲刈・瀬の浦・室津・明石・兵庫と並んで、主要な寄港地であり、そのことから瀬戸内海の要衝としての牛窓の地位が窺える。また、牛窓に現在残された街並みは日本の都市形成と外交・異文化交流との関係を現代に具体的に伝える貴重な例であることが強調された。朝鮮通信使においてコアとなるのは、

通信使を派遣する手続きとそれを迎える体制の構築からなる「御馳走」と呼ばれるプログラムである。「御馳走」を成功させることを幕府から命じられた当時の藩士や地元の有力者はたいへん腐心したようである。往復路の決定や迎接の組織化、接待プログラム、航海ルートの策定といったソフト面に加え、船団編成や港湾整備、通信網の確保、装飾といったハード面の準備が綿密に行われた。特に港湾整備は現在の牛窓の街並みにも名残（波止場、灯籠台、番所など）がみられ、港町・牛窓の発展に大きく貢献した。通信使団の規模は500名程度だったと言われ、当時の牛窓の街の規模に対してかなりの大きさであった。当時の牛窓では限られた空間でどのように対応したのか。これについて三宅氏は以下のような興味深い研究成果を示している。一般に、三使（正使・副使・従事官）、上官・中官・下官と地位によって迎接の建築的プログラムが定められるのだが、牛窓では当初、寺院（本蓮寺）の客殿で三使を受け入れ、また、上官・





の終了時刻を過ぎ、日が落ちて辺りがすっかり暗くなった頃、盛況のうちトークイベントは閉会となった。



翌日の唐琴通りまちあるきの様子

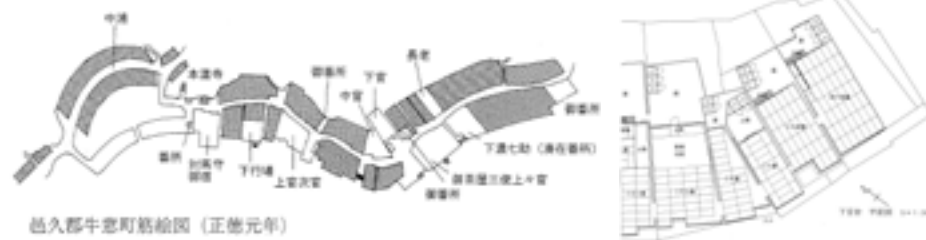


中官・下官を既存の建物（町家）を一時的な客館として改修して受け入れたという。上官・中官・下官が現在の唐琴通り沿い（本町・西町・閨町）の建物に分散して滞在したり、隣り合う複数の町家を改修し共同の台所・便所を設置して利用していた様子が当時の絵図・指図等を元に明らかにされた。既存の建物を有効活用する方法は、今風の言い方をすれば「リノベーション」

「修復型まちづくり」であり、当時の牛窓の人びとの創意工夫が窺える。その後、新築された「御茶屋」に迎接機能は集約されるが、その御茶屋も大規模な増築工事を含む増改築が幾度か行われたようである。ちなみに御茶屋は朝鮮通信使廃止後に役目を終え、明治初期に敷地が分割され、建物の大部分が建て替えられた。建て替え後の建物は現在も「御茶屋跡」として残っており、新たな用途が見いだされている。さらに、その東側に残る建物は江戸時代のオリジナルの部分であることが三宅氏のその後の調査で判明したという。トークイベントの翌日、三宅氏と唐琴通りを歩いて確認したところ、外観の改修が行われているため、言われてみないと江戸時代の建物だとは気づかないが、今もたしかにそこに存在している。この例の他にも、現在の唐琴通り周辺には歴史的な価値の高い建物がひっそりと埋もれているのかもしれない。

講演の後半は、陸路である京都〜江戸間の街道町（宿場）における朝鮮通信使の迎接と都市整備の関係、また、朝鮮

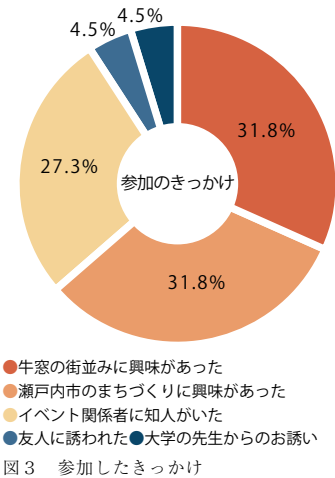
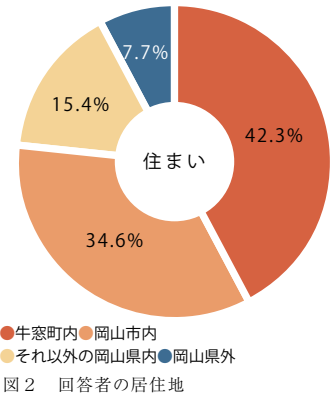
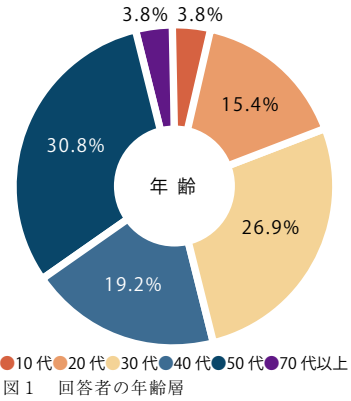
既存建物を活用した客館



\* 図面出典：三宅理一『江戸の外交都市 - 朝鮮通信使と町づくり』鹿島出版会, 1990

本土や中継地点であった対馬における日朝混合様式の成立など、三宅氏の牛窓での調査以後の研究成果が紹介された。そして、ソウルから瀬戸内海、江戸（東京）までの各地に残された朝鮮通信使関連の遺産は、朝鮮半島と日本列島を結ぶ文化の結節点であり、それらを結ぶことで「コリドー（道）」としての遺産になり得るという可能性・展望が示された。そのなかで牛窓は特に重要な位置を占め、牛窓の地域コミュニティは歴史の貴重な証言者であることが確認され、三宅氏の講演は締めくくられた。三宅氏の講演を受け、参加者とのあいだで質疑応答が行われた。参加者からは歴史的価値があるとは知らずに建物や街並みを壊してしまうケースがあり、それは勿体ないことであるという感想や、街並みを守るための具体的な方法、例えば街並み保全を行う組織・団体や街並みとスマホ・アプリを連動させた情報発信の仕組み、観光開発のあり方など、具体的な手法について意見や質問が述べられ、三宅氏とのあいだで活発な意見交換が行われた。予定

# 街並みへの関心…トークイベント来場者の声



建築的な価値に加えて、外交という歴史的なできごとの記憶の器としての街並みや建築の価値を考えると、街がさらに面白く見えてきた。
牛窓の街並みがかつて持っていた役割や価値を知ることができた。
迎接プログラムという、現代でいうとオリンピックの開催国が行う準備のようなものが昔からあって、牛窓が朝鮮通信使の迎接というイベントが行われた場所になっていたということに驚いた。
宿泊・食事施設、交通網、防災の仕組みなど、朝鮮通信使の迎接をきっかけとしてまちの機能が整備されていった様子が興味深かった。
木造建築がもつ可逆性や建築の形態は変わってもきちんと記録が残っていることに驚いた。
御茶屋の建物の過去と現在の比較が興味深かった。
朝鮮と交流していた当時の様子がわかってとても面白かった。間取りや建物の様式などが少しずつ変化しながら今でも同じような役割をもって使われていたり、残っていたりして、それに関連する歴史的な背景を知ることができてとても興味が湧いた。
古い街並みを活かした街づくりに関心があった。現在の街並みに残る歴史的な部分を、きちんと認識して街を歩いてみたいと思った。
三宅先生が最後のまとめで言われていた、朝鮮通信史遺産についての今後の展望や希望など。
既存の施設・建物を有効利用して朝鮮通信使を受け入れていたというお話が興味深かった。また、牛窓の歴史を考えるうえで、朝鮮通信使そのものについてももっと知りたいと思った。
リノベーションという言葉がなくとも、当時は既存のものを組み替えたり作り変えたりして「編集」する行為が当たり前のように行われ、編集し続けることでまちの機能を維持してきたことは、時代を経ても変わらない、現代に通じる人々の営みや価値観の一部であると感じた。

表1 特に興味・関心をもった内容（抜粋・要約）

トークイベント参加者へのアンケートを行ったところ、26名から回答が寄せられた（会場でQRコードを掲示しgoogleフォームからの入力を依頼）。

回答者の年齢の内訳は10代〜70代以上と幅広く、10代〜30代の比較的若い世代が半数近くを占めた（図1）。居住地は「牛窓町内」が42%最も多かったが、それ以外にも「岡山市内」（35%）や「それ以外の岡山県内」（15%）、そして「岡山県外」（8%）と、広い範囲から参加していることがわかる（図2）。参加のきっかけとしては、「牛窓の街並みに興味があった」（32%）、「瀬戸内市のまちづくりに興味があった」（32%）と、イベントの内容そのものへの関心が過半を占めており、他は知人・友人、大学の先生を通じてイベントの存在を知った、という回答であった（図3）。この他、今回のイベントで初めて牛窓テレモークでのイベントに参加したという回答者が全体の半数を占めた。

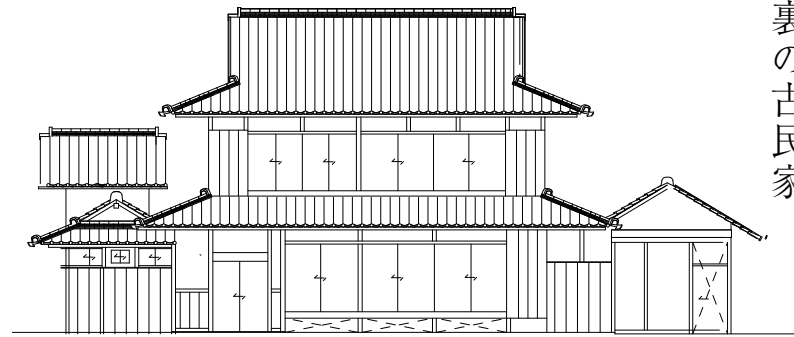
参加者が特に興味・関心を持った内容を表1にまとめた。朝鮮通信使の一行を牛窓の街で迎接したという事実自体が興味深かったという感想、既存の建物を有効活用して大人数の滞在に対応していたことや、そういった歴史的背景が継いでいることに関心を持ったという声も寄せられた。また、今回のイベントをきっかけに朝鮮通信使や牛窓の街並みに関心を抱いたという意見や、三宅氏が講演の最後で述べた牛窓を含む朝鮮通信使遺産の価値や地域コミュニティの役割・存在意義に可能性・希望を見出したという意見もみられた。

イベントや会場の雰囲気に関する感想として、牛窓在住と思われる人が思

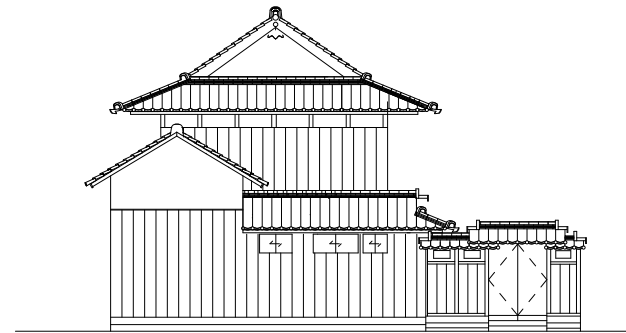
いのほか多く参加しているのが印象的であったという声も寄せられた。今回のイベントでは比較的若い世代であり、かつ牛窓で何らかの活動をしている人が一定数参加していた。そのことは質疑応答等での、活動の経験を踏まえた具体的かつ実践的な質問・意見の内容にも現れていた。また、テレモークの空間の心地よさ、非日常的な雰囲気がよかった、街並みの価値を再発見する機会になった、牛窓にさらに焦点を絞りたいと思った、といった感想が寄せられた。

全体として、今回のイベントの参加者の属性は多様な年齢層、牛窓内外の様々な地域にまたがっていたが、特に牛窓で活動する比較的若い世代が一定数参加しており、イベントやアンケートから牛窓の歴史や街並み保全への関心の高さが強く感じられた。

# 路地裏の古民家 建物の実測調査…住み継ぎにむけたケーススタディ



南面立面図



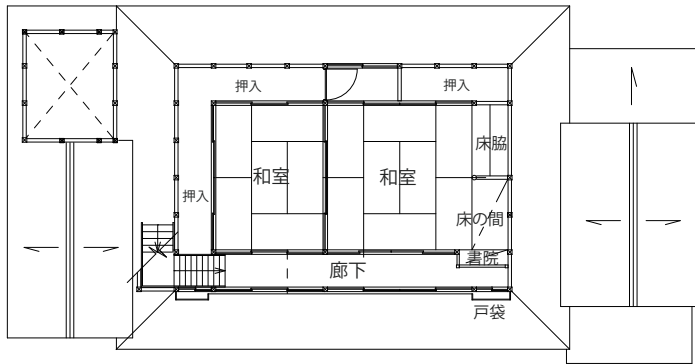
西面立面図

## 建物の実測調査

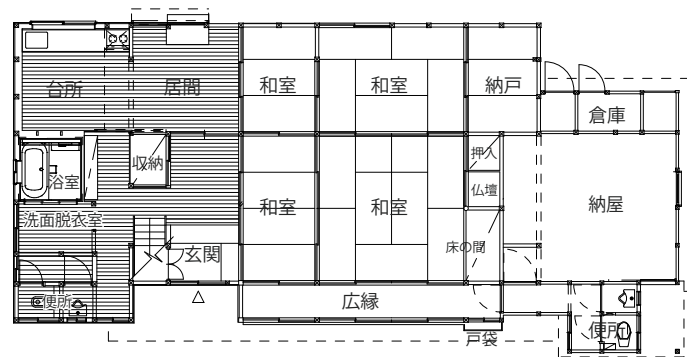
ロボの設立当初から、しおまち唐琴通り周辺の建物の状況を知るために、建物の実測調査を行ってきた。今年度は「路地裏の古民家」「丘の上の二軒長屋」「唐琴通りの元米屋」を実測することができた。3件に加え、前年度に実測していた「洋風の写真館」と「バス停前の元食堂」のCAD図面化を行った。図面化することで活用案を考えたり、改修する際の予算を検討しやすくなるためだ。全ての建物が築50年以上を経過しており、それぞれが地域の歴史と繋がり、地域を語る建築であった。実測調査は7月には岡山工業高校の学生、9月に行った牛窓ロボの夏合宿には京都大学、岡山県立大学、佐賀大学の学生と教員の参加があり、設計事務所ココロエが実測や図面化の指導を行った。

## 建物に関するヒヤリング

空き家所有者、移住者、地域の住民にヒヤリングを行った。空き家の所有者においては、建物を親族外に貸す、売る場合に親族間で意見のすり合わせが難しい、遠方に住んでいて将来的に管理ができない、牛窓に居住したことがない子供世代に建物を引き継ぐことが難しい、自ら利用しないので修繕費などをかけずらい、遠方に住んでいて家財の処分などが大変であるなどの意見があった。移住者においては、不動産屋などを通さず知り合いを通じて建物を見つけた、なるべく工費をかけず自分たちでできるところはDIYで行った等の意見があったこと、数名の方は1物件だけでなく地域内に複数棟を借り、用途を使い分けて活用していた。地域住民からは、少子高齢化で伝統行事の担い手が少ない、課題はあるが何から手を付けていいのかわからない、空き家になった建物が崩壊したことがあり不安である等の意見があった。来年度以降も継続してヒヤリングを続けていきたい。



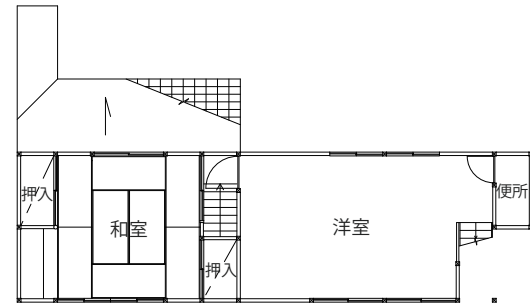
2階平面図



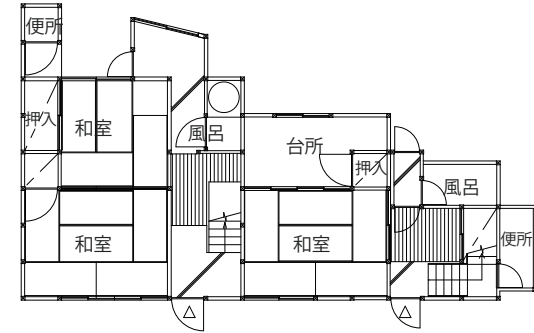
1階平面図







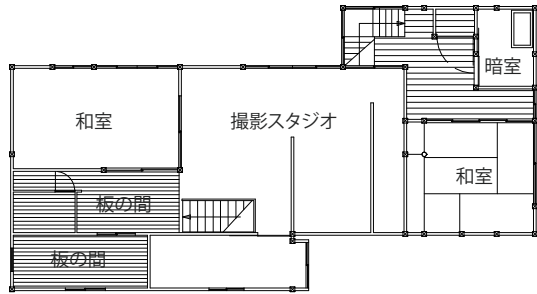
2階平面図



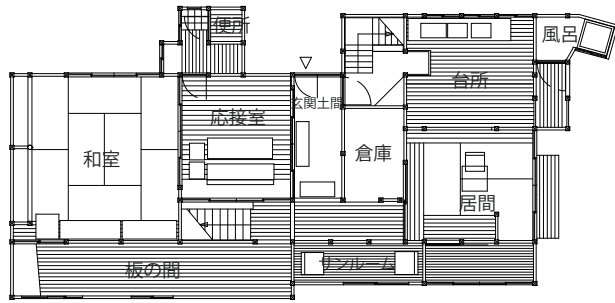
1階平面図



洋風の写真館



2階平面図



1階平面図



見えてきた課題

・古い建物が空き家になっていて、修費や解体費がかかることから放置されている建物も多くみられる。  
 ・多かれ少なかれ改修や増築がされており、全てを改修・活用していくには多くの費用がかかる。しつかり残す部分と減築する部分を検討し、効率的に費用をかけていくことが現実的な手段のひとつである。  
 ・家財や不用品、古畳などが残っており、

り、車輛が進入できない建物については、廃材処分費用や担い手に課題があることが分かった。

・すべての建物が汲み取り式便所で下水が通る見通しがなく、浄化槽の設置が困難な建物も多い。可能であっても車輛や重機が入りづらく、工費が高む。  
 ・漏水があると屋根の修繕費用に加え、構造や内装なども手をかけなければならぬ。空き家期間を長期化させず、居住者が屋根の状況を把握し、こまめに修繕できることが望ましい。



牛窓の良いところという点、のどかな風景や人との繋がりが、穏やかな気候など様々なものが挙げられる。そのなかでも、新旧が混ざりあった街並みはとりわけ、一言では言い表せない複雑な魅力を有している。初めて牛窓を訪れる人は、牛窓のこの街並みをどのように体験し、そこをどのような魅力を見出すのだろうか。私はこれを調べるため、牛窓の歩行体験に現れる魅力を、誰もが認めるであろう美しさから個人的で些細な発見まで幅広く記録する実験を行った。

実験では、唐琴通り周辺を一人ずつ2時間程度自由散策し、その間、各自が何かを感じたタイミングで動画を撮影し、その場面について説明してもらおうと依頼した。そうして地点ごとに得られた録音・録画及び位置座標によって参加者の体験を記録した。体験を補助し記録する

ための道具として撮影器具を考案し、参加者に使用してもらった(図1、図2)。

実験は2022年9月から12月にかけて、瀬戸内市移住交流促進協議会ならびに牛窓テレモークの協力を得て実施した。「牛窓のことをもっと知りたい人」という条件での募集に応じた20代の大学生や建築士ら計16名が参加し、それぞれの新鮮な街並み体験が計550地点、5時間超の動画データとして記録された。実施時間帯は午前・午後に分かれ、天候は晴天(うち曇天・雨天含む)11名、曇天4名、雨天1名だった。参加者の居住地は宮城県・千葉県・京都府・兵庫県・岡山県・広島県・佐賀県に分布した。参加者ごとの記録地点数の平均値は34.4で、最大値84、最小値2だった。

全ての記録地点を地図にプロットしてみると(図3)、体験は海沿い

から山腹の細路まで幅広く分布することが確認できた。実施後に行ったアンケートからも参加者が実験を通して足の軽くままに散策を楽しんだことがわかった。口述内容と映像から、参加者が各地点において何を発見しどう感じたかを読み取り、体験内容を要約した表を作成した(図4)。

実験について一例を紹介すると、ある参加者は、街並みに喚起される魅力が、美しいもの・風変わりな人工物・暮らしの営みを想像させるもの・神聖さをもつもの・歴史や過去を想像させるもの・身体行動を誘うものと多岐に渡っていた(表1)。

分析を進めるうちに、この散策実験で得られたデータは、参加者が個別要素に抱いた印象の集積にとどまらず、連続的な歩行体験を通じて要素が複雑に絡み合うことで生まれる街並みの魅力を表象するものだということがわかってきた。街並みの魅力に迫る探究を今後も続けていきたい。

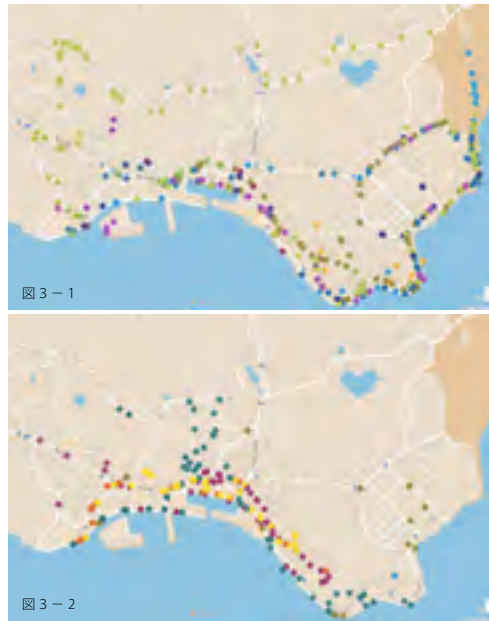


図3 図3-1: No. 1~10、図3-2: No. 11~16  
 参加者ごとに色分けした記録地点の分布



図1 実験用の撮影器具。アートフレームに小型カメラを搭載し、対象への注目を促した。

図2 街並みの散策実験の様子

地点	1	2	3	4
シーン				
感じられたこと	旅行って感じがする。鳥の鳴き声が海と空の青に映えている	ヤシの木がリゾート地の印象を感じさせる	唯一のコンビニらしい、不便そう	閑散としている。かつてのにぎわいの名残が感じられる、今となっては物寂しい
認識された事象	海鳥の鳴き声、海、空、好天気	ヤシの木、漁船、駐車場、ホテル	コンビニ	ヤシの木、ホテル、車

図4 街並み体験を要約した表の例

分類	例
美しいもの	高台からの眺望、夏雲の空、海
風変わりな人工物	船形の住宅、海水浴場のペイント、ヨット形の看板
暮らしの営みを想像させるもの	路傍の祠、住宅の表に置かれた所有物、海に面した建物、猫、何かを燃やす匂い、細い路地
神聖さをもつもの	牛窓神社参道
歴史や過去を想像させるもの	放置された船舶、ホテルリマー二前の人気の無い幹線道路、風化した看板
身体行動を誘うもの	開放的な直線道路、穏やかな海

表1 ある参加者が見出した魅力的な事象

場所	序盤(地点7,8)	終盤(地点43,44)
	津島医院 一 大浦間	唐琴通り周辺
内容	古民家の並びに違和感 内陸部はまるで山奥の村のよう 牛窓はリゾート地と聞いていたのに…	雑多な雰囲気生活感 道端の祠は海上安全祈願か? 住民の生活の歴史に思いを馳せた

表2 ある参加者の記録内容の遷移

# 調査の成果と今後の課題

今年度実施した調査・活動の成果と課題は以下の通りである。

住み継ぎインタビュー調査を、地域住民、移住者・就業者、空き家所有者を含む計15組を対象として行った。インタビューを通じて、住み継ぎの要因には建物に関わるもの（物件情報、売買・賃借、改修、維持管理等）だけでなく、街全体・地域に関するもの（街並み、自然、コミュニティ、仕事・暮らし等）も含まれ、多岐に渡ることがわかった。当初の予定より1組あたりにより多くの時間をかけたため、件数は当初の計画より伸びなかったが、特に移住者・就業者が牛窓の街に感じる魅力や課題を掘り下げることができた。地域住民、空き家所有者からみた住み継ぎの課題については今後、インタビューを継続するなかでさらに検討する必要がある。

なお、インタビューの成果の一部は

冊子『牛窓がたり』としてまとめ、市が進めるまちなか再生事業の一環で実施したワークショップ（牛窓読書会）において活用された。

丘の上の二軒長屋、路地裏の古民家、唐琴通りの元米屋の実測と図面化、以前実測を行った洋風の写真館、バス停前の元食堂の図面化を行った。これらは今後、住み継ぎの手法を検討するうえで基礎的な資料とする。うち2件（丘の上の二軒長屋と路地裏の古民家）において、改修すべき箇所・特徴的で保全すべき箇所、改修費用などを調査し住み継ぎの具体的な課題を探り、内装の解体・荷物の整理を行い、空き家の維持管理費用や人員の課題を探った。

近世以降の牛窓の都市形成と朝鮮通信使についての書籍『江戸の外交都市―朝鮮通信使と町づくり』の著者である三宅理一氏を招き、トークイベント

を行った。当初の予定を大幅に上回る48名の参加者があり、牛窓の街並み・まちづくりへの関心の高さが窺えた。『朝鮮通信使とその遺産』と題した三宅氏の講演では牛窓の都市形成の特質と朝鮮通信使関連遺産としての街並み・地域共同体の価値についての話があった。参加者には牛窓で活動する現役世代も多く、講演に続いて行われた三宅氏と参加者との意見交換では街並みの保全に対して取り組みを望む発言や具体的な手法に関する質問も多くあった。

総括すると、今年度は住み継ぎに関する街全体・地域の特徴や課題についての理解を深めることに主眼を置きつつ、今後、具体的な住み継ぎの手法を検討するうえでケーススタディの対象となる個別の建物・物件を抽出し、それらについての基礎的な調査を行うことができた。

今後は、住み継ぎインタビューを継



続しつつ、空き家改修のワークショップ（学生・移住者などによる空き家の部分的な改修ワークショップ）の実施、しおまち唐琴通り周辺の土地・建物利用調査（空洞化・空き家化の実態把握のための悉皆調査とその可視化）、類似・先進事例の調査・整理などを行う予定である。

# あとがき

調査を始めてみてわかったのは、住み継ぎには空き家活用に関わる土地・建物の現実的課題に加え、地元住民や移住者が大切にしている牛窓の歴史・文化というか、何か街の記憶に関する質的なものが関わっているということでした。それは牛窓の風景やおまち唐琴通りの街並み、お祭り・風習、そして人びとの些細な振る舞いのなかに今も残されており、忘却と想起を繰り返しつつも人びとを惹きつける要因になっ

かを始めている。シンプルで、しなやかで、たくましく感じました。牛窓を見守る穏やかな海のおかげか「住み継ぎ」には色々なハードルもあるけれど、不思議とどうにかなると思える、おおらかさも持ち合わせていると感じました。私たちの調査や研究が、過去と未来、人と人、モノとコトなどの橋渡し的な役割になれたらと思っています。(片岡八重子)

現在の牛窓の街並みは全体として地域の生活空間でありながら、こだわりの商店やアトリエなどが所々に点在し、海辺の美景を起点にして来訪者を内部へと誘っていく仕組みがあります。この外部との関わり合いも、時代を越えて愛される確かな魅力や、地元牛窓への愛着を育むひとつの刺激になっているのかもしれない。そんな視点も含めながら、ここまでの調査で感じた内

部の重層性と課題、その先の営みを、実際の住み継ぎに触れるなかで考えていきたいです。(天羽生悠矢)

時代の流れのなかで常に揺り動かされながらも、移住者の方々を惹きつけ続ける牛窓の景観。その魅力の源泉を体得しようと訪問を重ねてきました。インタビューを通して、景観だけでなく、牛窓の人たちの暮らし方、働き方、考え方によって作られる牛窓独自の人付き合いや時間の流れにも魅力は見出され、それが瀬戸内海を抱く港町の景観と合わさることで牛窓の引力を生み出していることに気づかされました。人に由来する魅力はともすると景観というモノから生まれる価値よりも揺らぎやすいかもしれませんが、住み継ぎが行われていく中でこれらの魅力がどう繋がれていくのか、あるいは変化していくのか、今後も観察していければ

と思います。(今堀紗理奈)

インタビュー調査を通して、人によって様々な解釈される牛窓の「なんとなく良さ」を聞き取ってきました。移住者の方も地元の方も、あえて牛窓の価値を内省して生活や活動の軸とされている様子が印象的でした。移住を決断した理由を言語化しようとする試み、また、移住者を惹きつける地元を相対化してとらえようとする試みのかに、牛窓の価値に対するそれぞれの考えの深まりを感じました。こうした住み継ぎをきっかけとして生まれる内省によって、牛窓の歴史や文化のなかに自分の生の在り方を組み込んでいくかのような、まちと住民の生活との不可分な関係が生まれているように感じました。(迎田暁)

## 牛窓再読 Revisiting Ushimado

発行日 令和5年2月28日

編集 ushimadolabo

執筆 片岡八重子  
前田昌弘  
天羽生悠矢  
迎田暁  
今堀紗理奈

デザイン 株式会社牛窓テレモーク  
小田聖子  
樋口真規

写真提供 株式会社牛窓テレモーク 相澤心也  
片岡八重子

図面作成 澤田倭芳那  
河村南  
片岡八重子

発行 ushimadolabo  
岡山県瀬戸内市牛窓町牛窓 4 4 4 8  
ushimado.TEPEMOK 2階



ushimado.labo 

京都大学前田研究室・コロロエー級建築設計事務所

\*この冊子は、令和4年度瀬戸内市協働提案事業（事業名：しおまち唐琴通りの歴史的建造物の住み継ぎワークショップ）の助成を受けて活動した成果をまとめたものです。